

# 2020 年度卒業論文

介護職からみたサービス付き高齢者住宅の現状と課題

——住居と施設の狭間——

2017 年度入学

九州大学文学部人文学科

社会学・地域福祉社会学研究室

提出日 2020 年 1 月 8 日

## 要約

少子高齢化の進展により、日本では高齢者介護問題に対する打ち手として、新たな介護システムを導入した。それが、1997年の国会にて制定後、2000年の4月1日から導入された介護保険制度である。介護保険制度導入以前は、主に高齢者介護は家族、主に女性を中心を担っていたが、世帯構造の変化や女性の社会進出によって、家族機能は低下し、医療技術の進歩による介護の重度化・長期化も相まって、家族がこれまでのように高齢者の介護を担うことは難しい状況となった。介護保険制度は家族介護から社会的介護へ移行した画期的な制度として位置づけられており、介護の外部化は、まさに歴史的な必然性として要介護者の社会化、社会的介護を求めるのである。だが、介護保険制度は制度導入時から多くの課題を内包したままの出発となつたため、制度の根本を大きく変容する改正がその後も度々行われることとなった。また、懸念されていた財政問題についても、制度導入後すぐに頭を悩ませる問題となり、持続可能性の確保が課題として挙げられている。そして、2025年には団塊世代が75歳以上を迎える、介護の需要が増大することが見込まれ、介護職員は253万人必要とされている。だが、実際に供給の見込める介護職員は約215万人であり、約38万人が不足すると推定されている。このように、介護業界のニーズは増え拡大するものの、その増加に施設の供給が追いつかず、介護難民が増幅する事態に陥っている。

その状況を受け、政府は施設ではなく、高齢者が住み慣れた地域の中で介護を受けるできる在宅介護への移行を進めた。「地域包括ケアシステム」の構築もその一環である。日本の介護が、「施設介護から在宅介護」へ大きく変容を遂げようとしている今、その受け皿となる高齢者の住まいの確保が求められている。こうした背景のもと、2011年に「高齢者の居住の安全確保に関する法律」が改正され、新形式の自立高齢者あるいは要支援・要介護高齢者向け居住施設として、「サービス付き高齢者向け住宅」が誕生した。日本の高齢者向け住宅施策は、サービス付き高齢者向け住宅を軸とする新たな段階へ進んでいく。よって、サービス付き高齢者向け住宅は高齢者居住の安定化の鍵を握っているともいえる。だが、制度創設からちょうど10年余りが経過し、高齢者住宅の有力な選択肢として供給が進む一方で、様々な課題があるのも事実である。

そもそもサービス付き高齢者向け住宅に関する先行研究は少なく、現場で働く介護職の声は埋もれてしまっている。こうした現状を踏まえ、サービス付き高齢者向け住宅の現状や課題を、実際に働く介護職の目線から明らかにしていくことが本研究の目的である。そのためのアプローチとして、本研究ではサービス付き高齢者向け住宅で働く介護職4名のライ

ヒストリーを用いている。調査対象者は4名とも2011年4月に創設された熊本県のSハイムで現在働いている。その中には、はじめての職場がSハイムである介護歴3年の男性や、創設当初からSハイムで働いている介護歴20年の女性もいた。それぞれの立場が異なる調査対象者たちに今日までの経験を語ってもらい、入居者やその家族に対する思いや葛藤、国に対する思いなどについて、その多様な側面を浮き彫りにしていく。そして、サービス付き高齢者向け住宅に関する特有の問題点や困難を描き出すことを目指す。さらに、サービス付き高齢者向け住宅の高齢者居住の安定化を図る糸口も模索していく。その結果、本調査では4つの知見が新たに得られた。

1つ目は、サービス付き高齢者向け住宅の入居者は、認知症や要介護状態が進み、そこで生活が困難になった際、住み替えをするか否かという選択にも悩まされてきた。2つ目は、サービス付き高齢者向け住宅における家族支援の必要性が読み取れた。そこでは、家族の支援を獲得するために試行錯誤する介護職員の姿にも着目した。3つ目は、サービス付き高齢者向け住宅の入居者の中には、介助なしでは生きられない自分の将来像を想像し、不安を抱えたまま過ごす入居者もいた。4つ目は、サービス付き高齢者向け住宅では情報体制の基盤が整えられていないことから、入居者やその家族に正確な情報が行き届かず、トラブルを招くケースもあった。これらの知見は、「住居」と「施設」の狭間で揺れ動くジレンマの中で引き起こされた問題であった。今後、サービス付き高齢者向け住宅をどのような立ち位置で扱うのか再考していくことは急務である。最後に、本研究では入居者とその家族の聞き取り調査は叶わなかったため、両者の関係性について詳しく言及することはできなかったことが本研究の課題として挙げられる。

## 目次

1	研究の目的.....	1
2	先行研究 .....	3
2.1	日本の高齢化問題.....	3
2.1.1	現状と将来.....	3
2.1.2	要因.....	3
2.1.3	全体への影響.....	4
2.1.4	福祉領域への影響.....	5
2.2.	家族介護から社会介護へ.....	5
2.2.1	家族介護の状況.....	5
2.2.2	家族介護者の精神状態.....	6
2.2.3	女性介護者の苦悩.....	7
2.2.4	家族形態の変化.....	7
2.2.5	家族介護の限界.....	8
2.3	介護の社会化.....	9
2.3.1	介護の社会化の始まり .....	9
2.3.2	法整備の歴史 .....	10
2.3.3	介護保険制度の歩み .....	12
2.4	現場の介護職.....	14
2.4.1	慢性化する人手不足 .....	14
2.4.2	不十分な介護労働施策 .....	16
2.5	サービス付き高齢者向け住宅 .....	17
2.5.1	高齢者向け住宅政策の見直し .....	17
2.5.2	サービス付き高齢者向け住宅の概要 .....	19
2.5.3	サービス付き高齢者向け住宅に関する先行研究 .....	21
3	インタビュー調査 .....	23
3.1	調査概要 .....	23
3.2	Sハイムの概要 .....	23
3.3	調査対象者のプロフィール .....	24
4	現場で働く介護職 4 名の語り .....	25

4.1 井上氏(仮名) .....	25
4.2 村山氏(仮名) .....	29
4.3 増谷氏(仮名) .....	34
4.4 澤田氏(仮名) .....	39
5 考察 .....	45
5.1 選択肢の喪失 .....	45
5.2 「家族支援」の必要性と獲得 .....	46
5.3 自立高齢者の募る不安 .....	47
5.4 情報提供の不足とその可能性 .....	48
6 結論 .....	50
[参考文献] .....	53